

特別調査

インターンシップに関する調査

日本経団連「倫理憲章」の見直し(2011年3月改定)により、インターンシップのあり方が厳格化されてから4年。ハードルが上がったことで一旦は実施企業が減少したが、受け入れ態勢が整ったことで再び増加に転じ、さらに今回の採用活動時期の繰り下げで、昨夏以降、実施企業は急激に増えた。

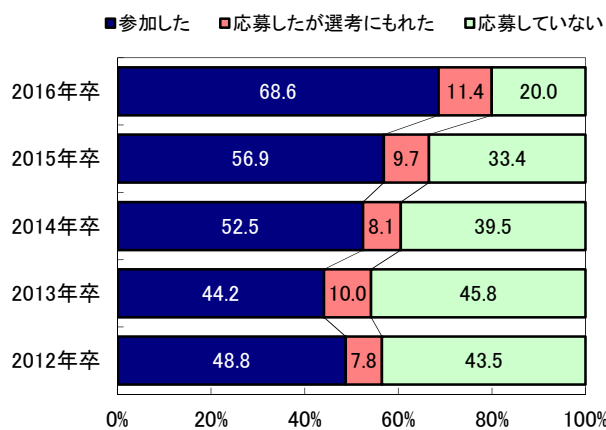
学生との早期の接点として注目を集めた格好のインターンシップ。参加学生の意識や満足度はどうだったのか。また、就職意向などに影響はあったのだろうか——。インターンシップ参加経験のある2016年卒学生モニターを対象に、参加したインターンシップの内容や感想、参加企業への就職志望度などを調査し、インターンシップの影響について分析・考察した。

【主な調査項目】

1. 参加したインターンシップの内容
2. インターンシップの情報を探し始めた時期
3. インターンシップ先を探す際に重視した点
4. インターンシップの参加目的
5. インターンシップ参加前後の就職志望度の変化
6. インターンシップの満足状況(詳細)
7. インターンシップ参加企業への就職志望度(詳細)
8. インターンシップ経験による成長実感
9. インターンシップ参加企業への就職エントリー状況
10. インターンシップに参加しやすい時期・期間
11. 低学年時にインターンシップに参加しなかった理由

【参考】

インターンシップ参加経験



(各年とも3年生の11月調査より)

《調査概要》

調査対象：2016年3月卒業予定の全国の大学4年生(理系は大学院修士課程2年生含む)のうち、1社以上のインターンシップ参加経験者

回答数：696人

文系男子	文系女子	理系男子	理系女子
212人	215人	181人	88人

調査方法：インターネット調査法

調査期間：2015年3月19日~30日

サンプリング：日経就職ナビ2016就職活動モニター

◆本資料に関するお問い合わせ先：03-4316-5505/株式会社ディスコ キャリアリサーチ

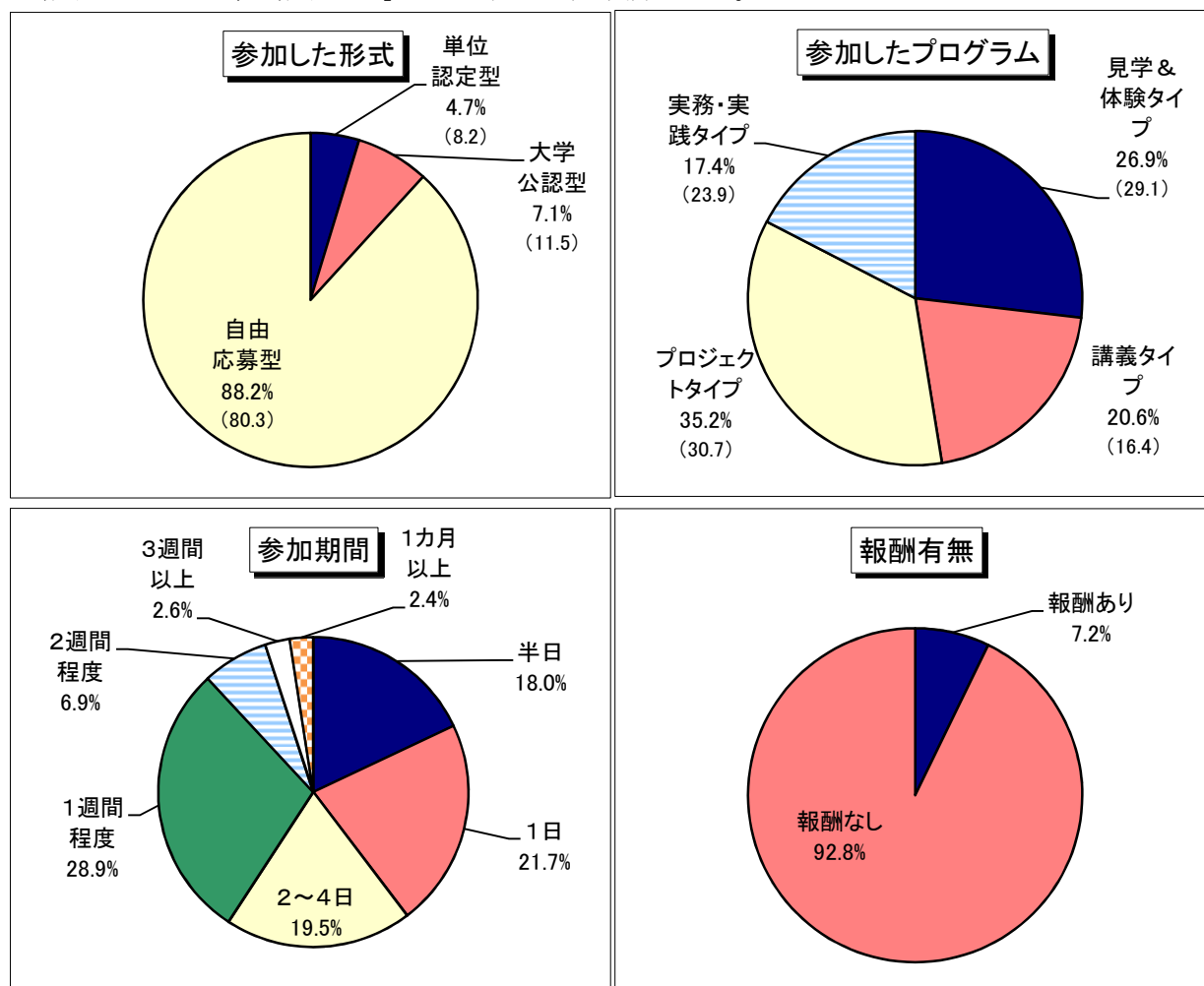
「日経就職ナビ 就職活動モニター調査」は、株式会社日経HRと株式会社ディスコが大学生の就職活動状況を調査することを目的として実施しています。日経就職ナビは日本経済新聞社が主管し、株式会社日経HRが企画・管理を担当し、株式会社ディスコが運営事務局を務めています。

1. 参加したインターンシップの内容

最初に、就職活動モニターが実際に参加したインターンシップの概要を確認しよう。まず、参加形式は「自由応募型」が88.2%と9割に迫り、前年度モニターの80.3%から8ポイント近く増えた。大学のキャリアセンターなどが取りまとめて応募する「大学公認型」は7.1%、授業の一環として行われる「単位認定型」は4.7%で、揃って割合を下げた。これらの実施が減ったわけではなく、「自由応募型」への参加数が増えたために、相対的に割合が下がったと見られる。

参加したプログラム(下注)を見ると、最も多いのが前年同様「プロジェクトタイプ」で、35.2%と前年より4.5ポイント増えた。「講義タイプ」も16.4%から20.6%へと割合を増やした。職場に配属され業務を任される「実務・実践タイプ」は23.9%から17.4%に減り、その結果「就業体験」という本来の意味でのインターンシップが最も少なくなった。

参加期間は、「1週間程度」が28.9%で最多だが、「2~4日」19.5%、「1日」21.7%、「半日」18.0%と、「指針」の条件を満たさないショートプログラムへの参加が59.2%と約6割を占める。報酬については、「報酬あり」は7.2%と1割未満だった。



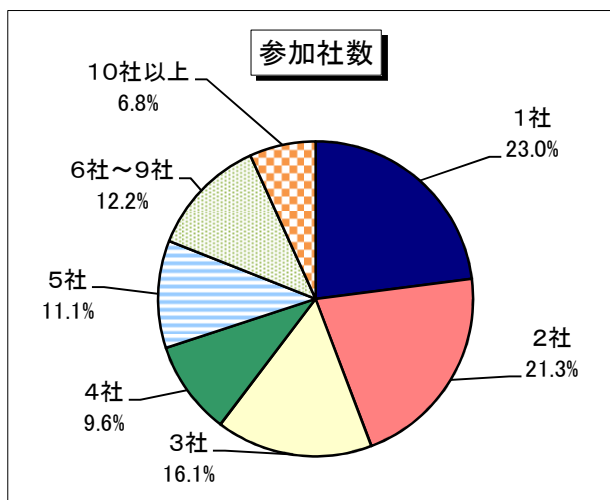
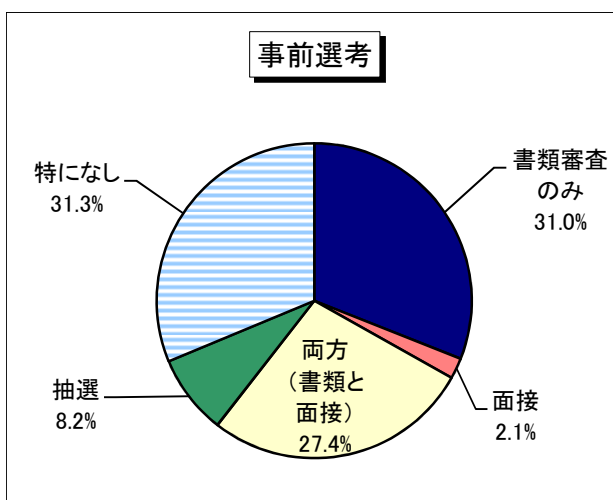
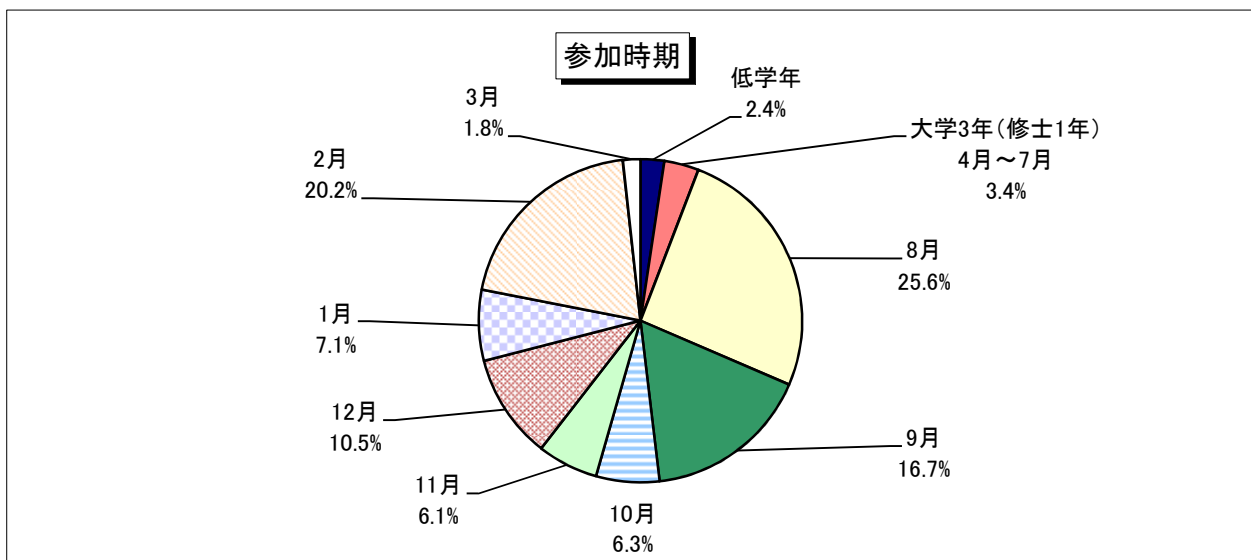
※ () 内は、前年度調査の数値。以下同。

(注)各プログラムの違い
 ●見学&体験タイプ =実際の職場で業務について説明を受け、仕事を少しだけ体験できる。
 ●講義タイプ =業界・企業・仕事についての講義のなかで、その企業の事業内容を理解し、「働く」について学ぶ。
 ●プロジェクトタイプ =学生でチームを組み、その企業の事業にかかわる課題に取り組む。
 ●実務・実践タイプ =各部署に配属され、スタッフの一人として業務を任される。
 ※複数のプログラムを組み合わせる場合には、主なもの1つを選択

参加時期は、大学が夏休み中の「8月」が最も多く、全体の25.6%。前年調査までは「9月」がこれに続いたが、今期は採用活動時期の繰り下げにより大きな変化が見られる。「2月」が20.2%で2番目に多くなるなど、冬のインターンが急激に増えた。12月～1月をあわせると37.8%で、8月・9月をあわせたサマージョブ(42.3%)と4ポイントほどの差に迫った。

事前選考については、前年は「書類審査のみ」が最も多かったが、今回は「特になし」が23.3%から31.3%へと8ポイント増え最多となった。「書類審査と面接」が30.2%から27.4%へと減るなど、参加のハードルは下がっているように見える。しかし、「特になし」の多くは「半日」や「1日」の短期プログラムのものであり、5日間以上のものは事前審査があるケースが依然主流だ。

参加したインターンシップの社数の分布をみると、最も多いのは「1社」23.0%だが、僅差で「2社」が続く(21.3%)。今回調査では回答者の77.0%が複数社のインターンシップ経験をもち、5社以上の経験を有するのは、あわせて30.1%と3割を超える。

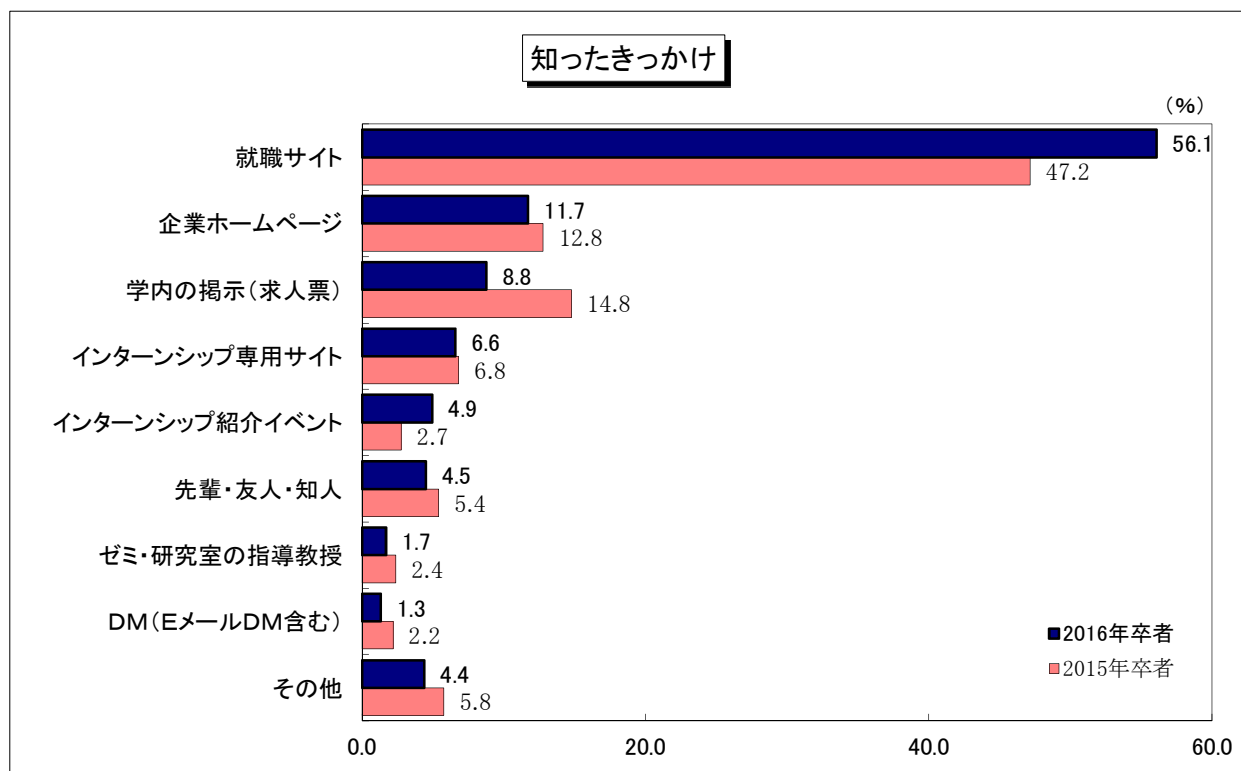
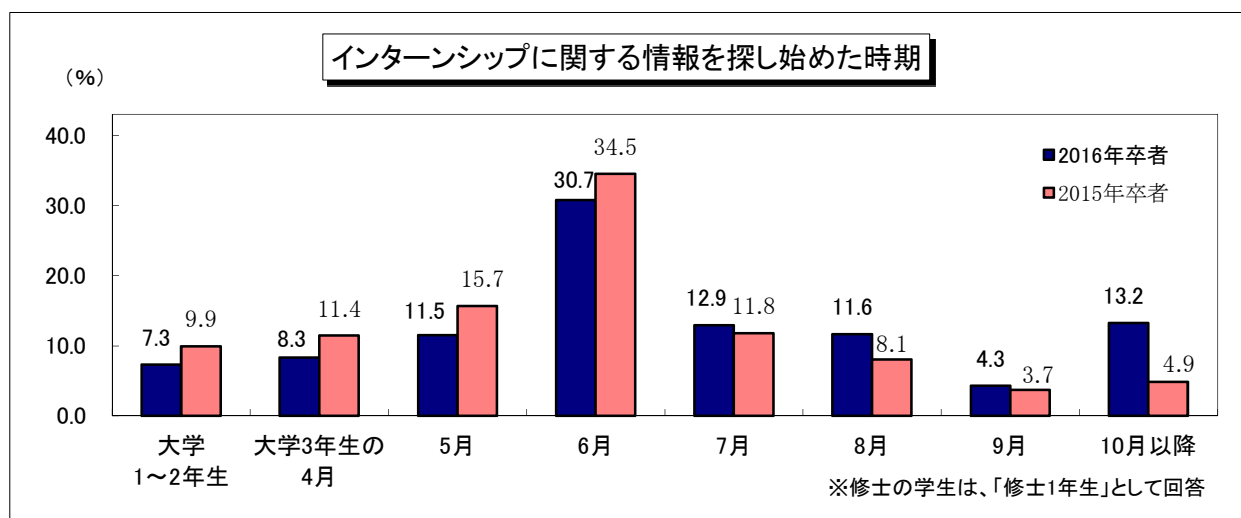


2. インターンシップの情報を探し始めた時期

3 ページで見たように、インターンシップへの参加が「8月」「9月」といった夏休み期間だけでなく、冬場にも増えた結果、インターンシップに関する情報（募集企業）を探し始めた時期にも変化が見られる。「6月」が30.7%と3割を占め突出している点は同じだが、前年調査（34.5%）よりも減り、「10月以降」が4.9%から13.2%へと大きく増えた。

また、参加したインターンシップを知ったきっかけは「就職サイト」が今回も最も多く、その割合も47.2%から56.1%へと約9ポイント伸びている。

これまでは、6月にプレオープンする就職サイトで募集企業を探し始め、応募し、夏休みに参加するというのが一つの流れになっていたが、今回の調査では、就職サイトを利用して秋や冬のインターンシップを探す割合が増えたことが読み取れる。

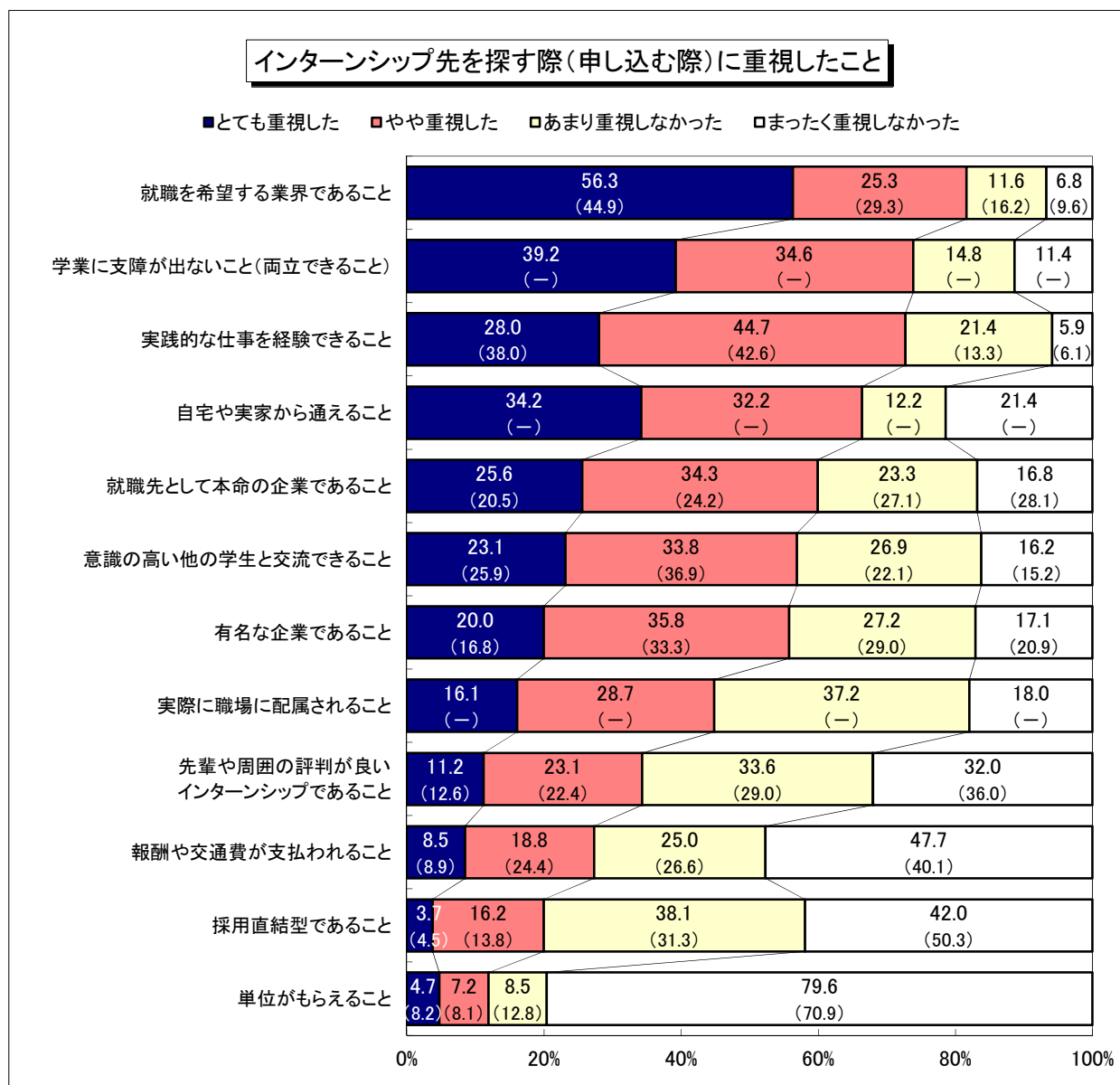


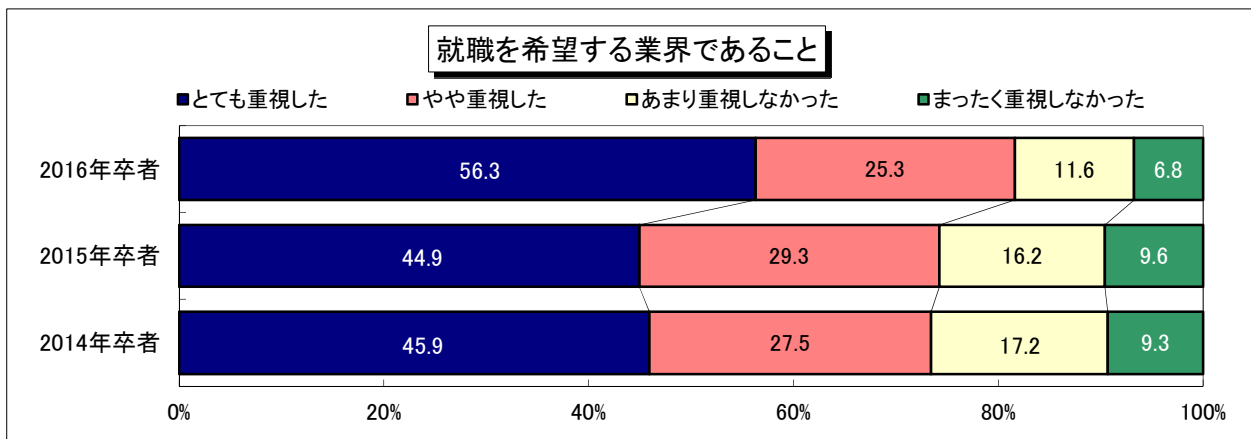
3. インターンシップ先を探す際に重視した点

インターンシップ先を探す際の重視項目について、12項目に分けて、それぞれ重視した割合を尋ねた。「重視した」と回答した人（「とても重視した」「やや重視した」の合計）が最も多かったのは「就職を希望する業界であること」で、81.6%と8割以上にのぼる。次いで「学業に支障が出ないこと（両立できること）」73.8%、「実践的な仕事を経験できること」72.7%の2項目が7割を超えた。

「とても重視した」に限って見ても、「就職を希望する業界であること」は56.3%と半数を超え最も多かった。また、この3カ年の変化みると（グラフは次ページ）、今回は「とても重視した」の割合が増えており、インターンシップをその先の就職活動を意識した業界研究の場と捉える学生が増えたことがうかがえる。

ちなみに、逆に重視した学生が減ったのは「実践的な仕事を経験できること」「意識の高い他の学生と交流できること」など。

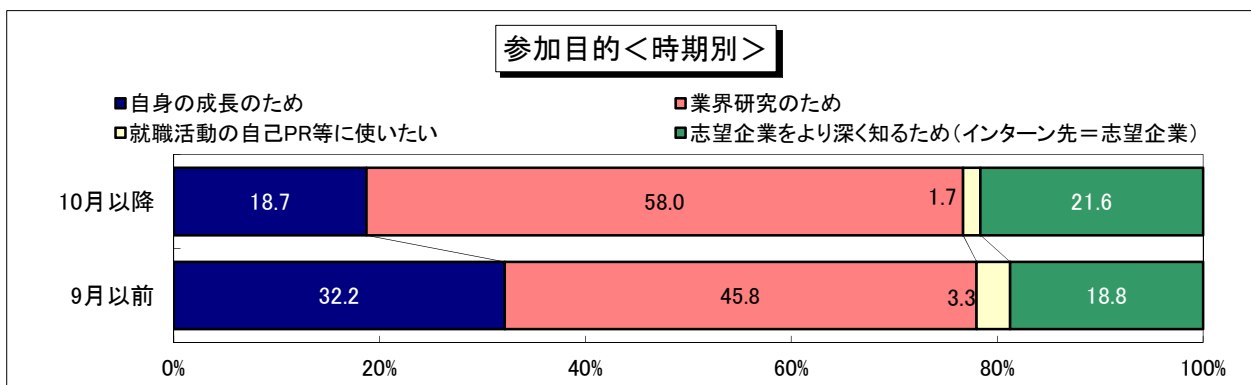
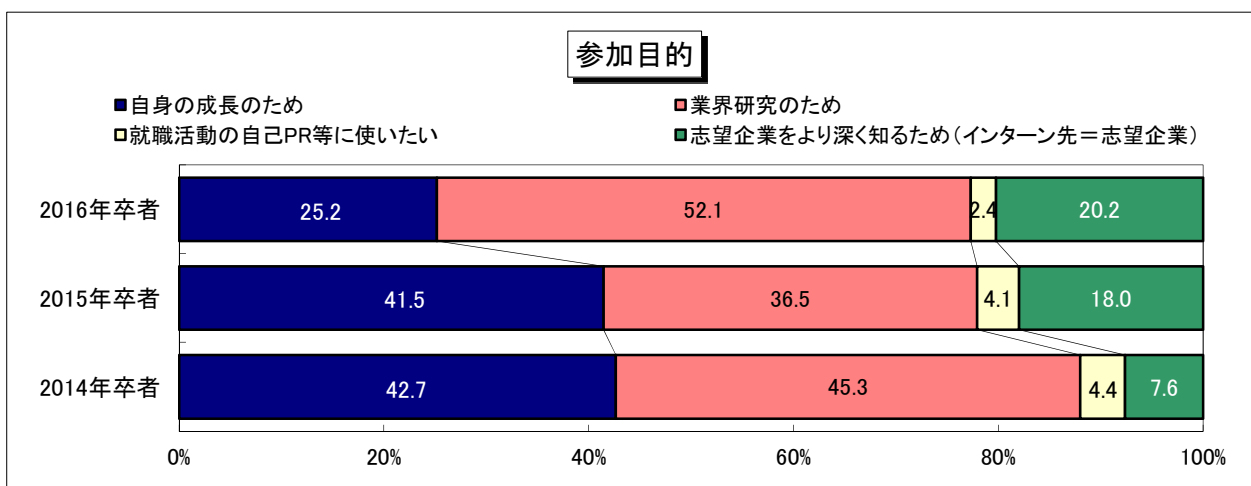




4. インターンシップの参加目的

インターンシップの参加目的についても、この3カ年の変化を見てみよう。過去2年間は「自身の成長のため」が4割を超えていたが、今回調査では25.2%へと急激に減少した。代わりに「業界研究のため」が52.1%と過半数に達し、増加が著しい。先に確認した「インターンシップ先を探す際に重視した点」の結果とも相関性が見られ、インターンシップを就職活動の一環と捉えるのが主流になっていると言える。「志望企業をより深く知るため」という、インターンシップ前から就職先として狙いを定めていた層は20.2%と2割強だが、年々その割合が増している。

これを参加時期別に見てみると、「9月以前」は「自身の成長のため」が32.2%と3割強あったのに対し、「10月以降」は18.7%へと下がり、代わりに「業界研究のため」が58.0%と大きく増えるなど、秋以降のインターンは、より就職を意識したものへと変化している様子が見られる。

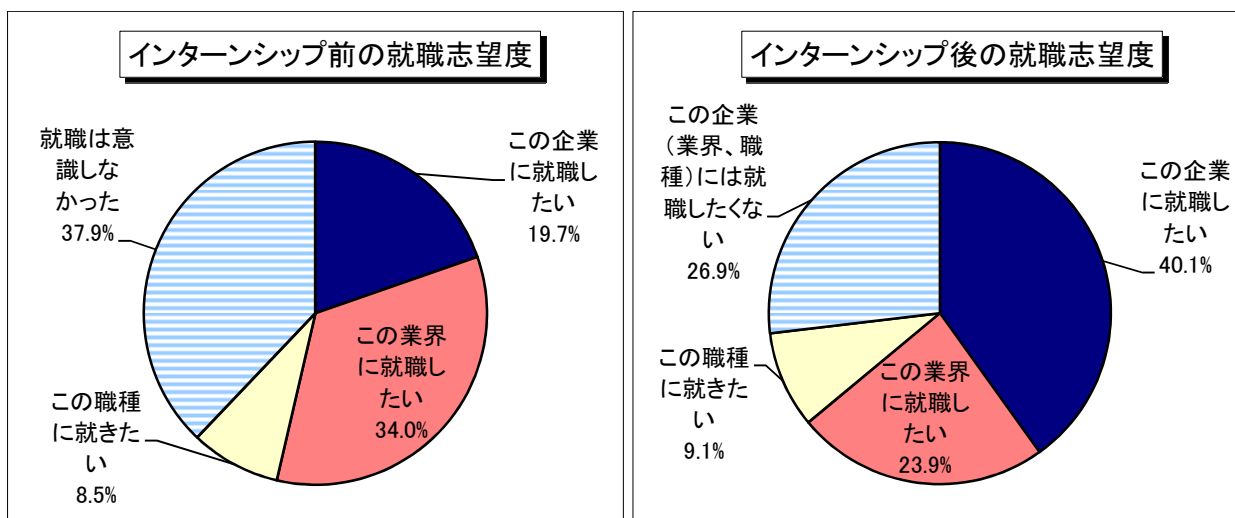


5. インターンシップ参加前後の就職志望度の変化

ここまでの結果から、インターンシップにおける就職活動の色が急激に濃くなったことが分かったが、インターンシップに参加する前と、実際に参加した後とで、その企業への就職志望度がどう変化したかを比較してみたい。インターン前は「この企業に就職したい」は19.7%と2割弱だったが、参加後は40.1%へと倍増している。企業を知ることによって就職志望度が高まったと考えられる。

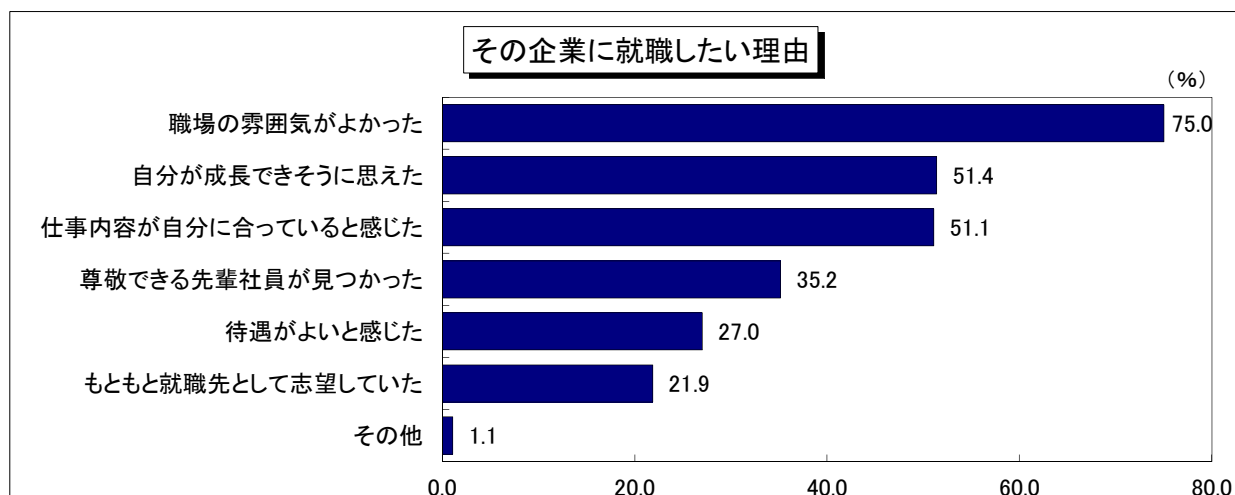
下表は、インターンシップ参加前の就職志望度ごとに参加後の志望度の分布を示したものだ。「就職は意識しなかった」と回答したもののうち、参加後に「この企業に就職したい」に変化したのは25.6%。一方で、「この企業に就職したい」が、「この企業（業界、職種）には就職したくない」に変化したのは28.9%で、インターンシップに参加することで自分には合わないと判断した割合は3割弱だった。

さて、その企業に就職したいと答えた際の理由は、「職場の雰囲気よかった」が75.0%と突出して多く、「仕事内容が自分に合っていると感じた」51.1%を大きく上回った。



(%)

【インターンシップ前の就職志望度】	【インターンシップ後の就職志望度】			
	この企業に就職したい	この業界に就職したい	この職種に就きたい	この企業（業界、職種）には就職したくない
この企業に就職したい	63.3	6.2	1.5	28.9
この業界に就職したい	36.3	46.3	3.1	14.2
この職種に就きたい	25.2	17.0	40.7	17.0
就職は意識しなかった	25.6	13.6	11.2	49.6

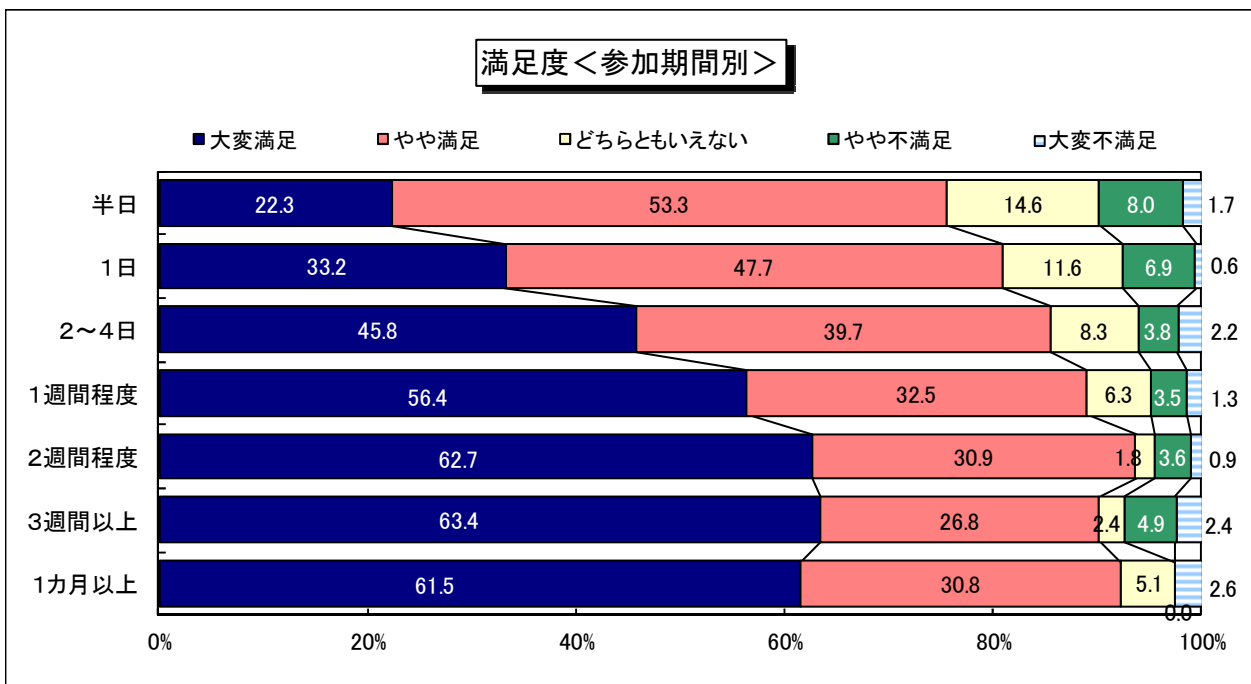
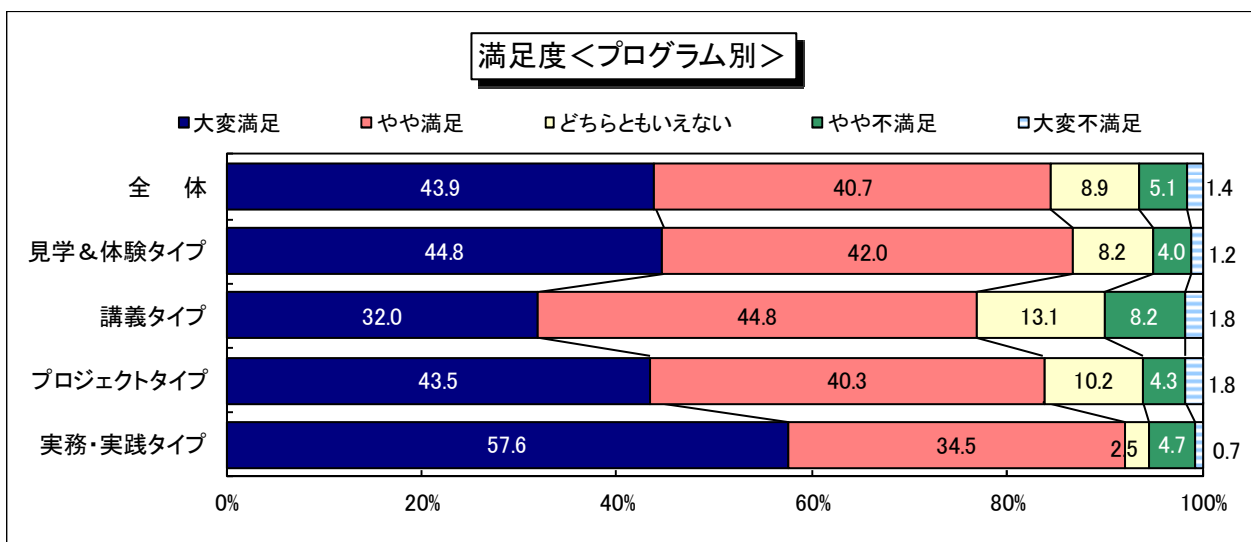


6. インターンシップの満足状況（プログラム別／期間別）

インターンシップに参加した満足度は、「大変満足」が43.9%と4割強で、「やや満足」40.7%とあわせると84.6%と高い数字を示し、満足度は非常に高かった。

この満足度を、参加したプログラム別、参加期間別でクロス集計してみると、満足度が高いプログラムは「実務・実践タイプ」で、57.6%が「大変満足」と回答。「やや満足」をあわせると92.1%と9割を超える。一方、「講義タイプ」は最も満足度が低く、「大変満足」は32.0%と約3割にとどまる。

参加期間別に見ると、期間が長くなるにつれ満足度は高まり、相関関係が見られる。「半日」を非常に満足と回答したのは22.3%と約2割で、「1日」は33.2%と約3割にとどまった。こうした短期のインターンは講義タイプのプログラムが多いことも影響しているだろう。「3カ月以上」「1カ月以上」は参加者が限られ母数が少ないため参考値として見る必要があるが、期間の長さで満足度は一般に正比例すると捉えてよさそうだ。

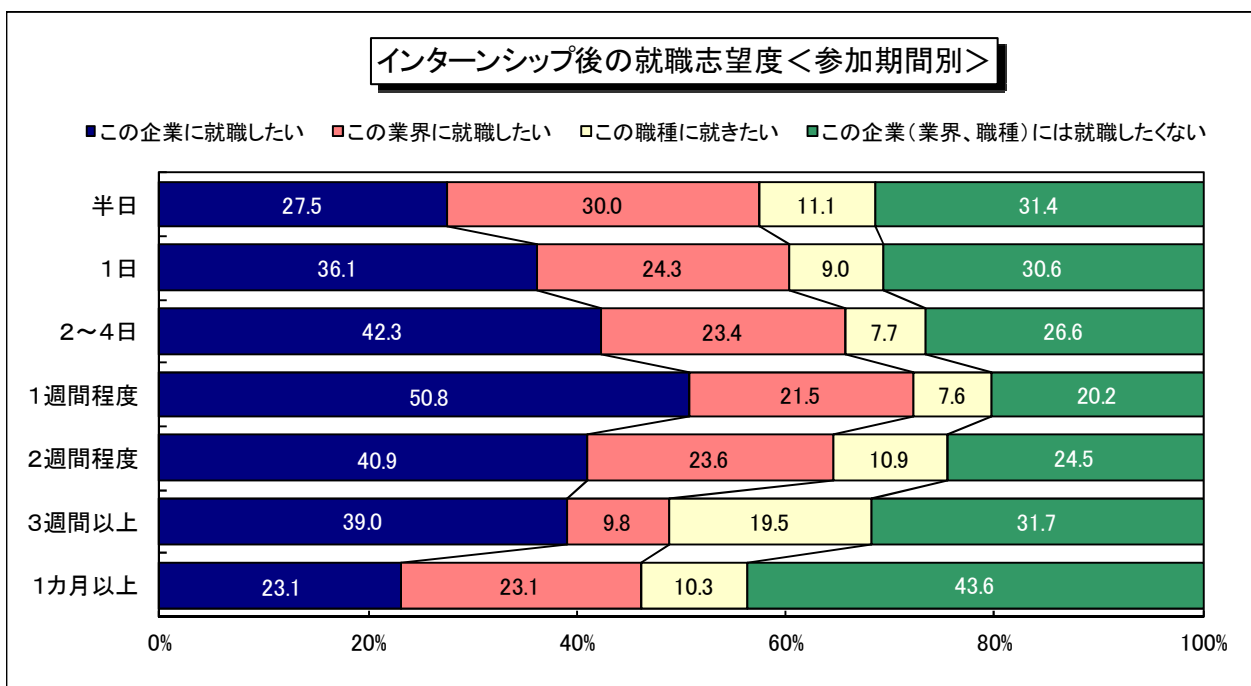
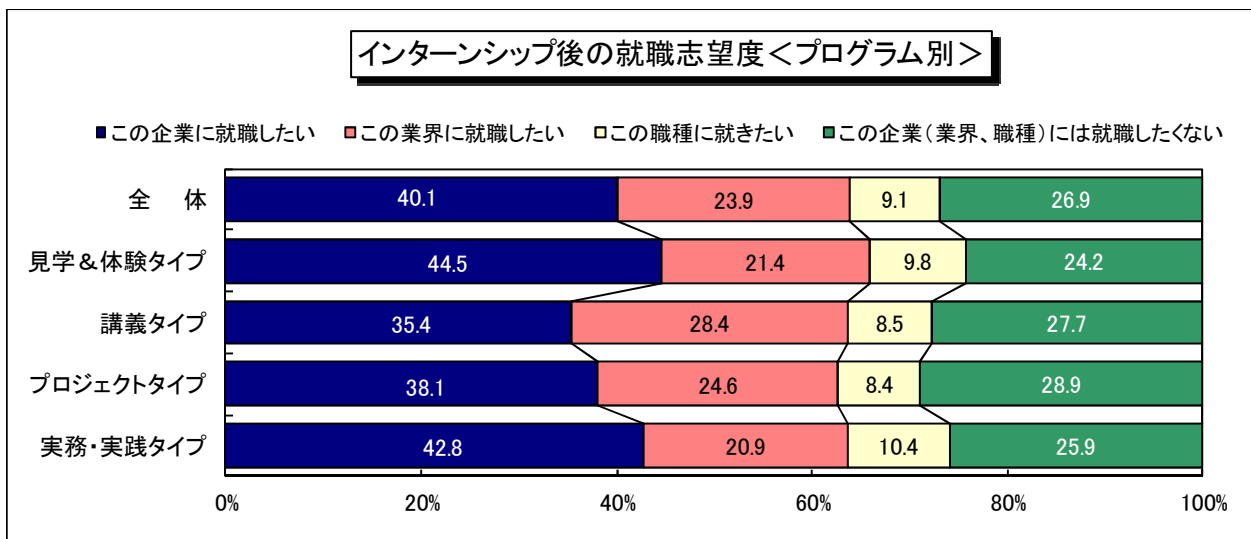


7. インターンシップ参加企業への就職志望度 (プログラム別/期間別)

インターンシップ参加企業への就職志望度についても、同様にクロス集計した。

プログラムによる大きな差は見られないが、「見学&体験タイプ」が、「この企業に就職したい」という回答が 44.5%で最も高かった。また、「講義タイプ」は、他のプログラムに比べ満足度の低さが目立ったが、就職志望度はそれほど低くなかった。「この業界に就職したい」と回答した割合が 28.4%と他のプログラムより高かったが、就業体験という面で不満はあっても、業界の特徴や動向といった業界知識が深まる講義を受け、就職先として興味をもった学生が少なくなかったことが推測できる。

参加期間別では「1週間程度」が「この企業に就職したい」との回答が最も高く (50.8%)、「1カ月以上」が最も低い (23.1%)。「1カ月以上」は「この企業 (業界、職種) には就職したくない」が 43.6%と4割を超えるが、長く参加したことで、仕事や企業の実情が見え、判断材料が増えたためと思われる。適職を探る手がかりとなることは、インターンシップの本来の目的にかなっており、企業・学生双方にとって決して悪いことではない。

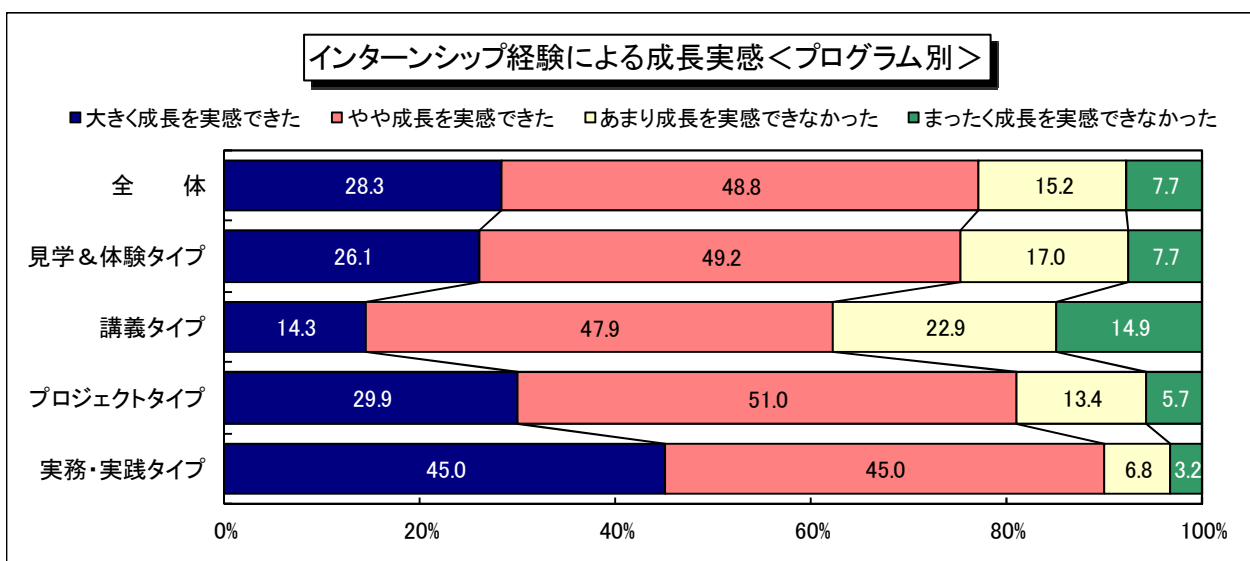


8. インターンシップ経験による成長実感

インターンシップを経験したことで「大きく成長を実感できた」と回答した割合は28.3%。「やや成長を実感できた」48.8%とあわせると77.1%と7割を超え、「あまり成長を実感できなかった」「まったく成長を実感できなかった」をあわせた22.9%を大きく上回った。

成長の実感は、実際の職場に配属されて業務を任される「実務・実践タイプ」を受けた学生において顕著で、90.0%と9割が「成長を実感できた」と回答した。「講義タイプ」は短期間の開催が多いこともあり、「成長を実感できた」の割合が他のプログラムよりも低い。

成長の中身についてのコメントを見ると、自分の適性或適職への気付きや手掛かりを掴めたことを「成長」と捉える意見が比較的多かった。中には、業界研究や企業研究が進んだこと、就職活動へのモチベーションが上がったことなどを挙げる声もあった。



■成長の中身

- 技術営業についてイメージできていなかったが、体験してみて楽しいと思ったし、多くの人と接する仕事に向いていると感じた。 <1週間程度/見学&体験>
- 働く中でプログラムを書くときと自分の趣味のプログラムを書くときで気をつけることの違いや、他人に見せるプログラムとして大事なことを学べた。 <3週間程度/実務・実践>
- グループディスカッション（ワーク）において、自分は何のような役割が得意なのか知ることができた。また、初めて社員の方との座談会を経験し、質問の仕方などを学んだ。 <1日間/プロジェクト>
- 接客のアルバイトをしているので、接客には自信があった。しかし、厳しく指摘をしていただき自分の能力は低いということがわかった。自分を見直す良いきっかけとなった。 <2週間程度/実務・実践>
- 他大学の優秀な学生と交流し、自分の未熟さを知った。インターンシップ先の業界についての知識が深まり、志望度が増した。 <2週間程度/プロジェクト>
- ビジネスマナーを少し身につけることができた。 <半日/講義>
- 業界研究の手掛かりになった。 <1日間/プロジェクト>
- 正社員の方がするような仕事に取り組むことができたので、仕事について本気で考えるようになったこと。 <1カ月以上/実務・実践>
- レベルの高い人たちが集まっていて自分の能力を把握することには役立ったように感じる。しかし、実質2日間半の内容では成長できると感じるには短すぎる期間だったように感じた。 <2~4日間/見学・体験>

9. インターンシップ参加企業への就職エントリー状況

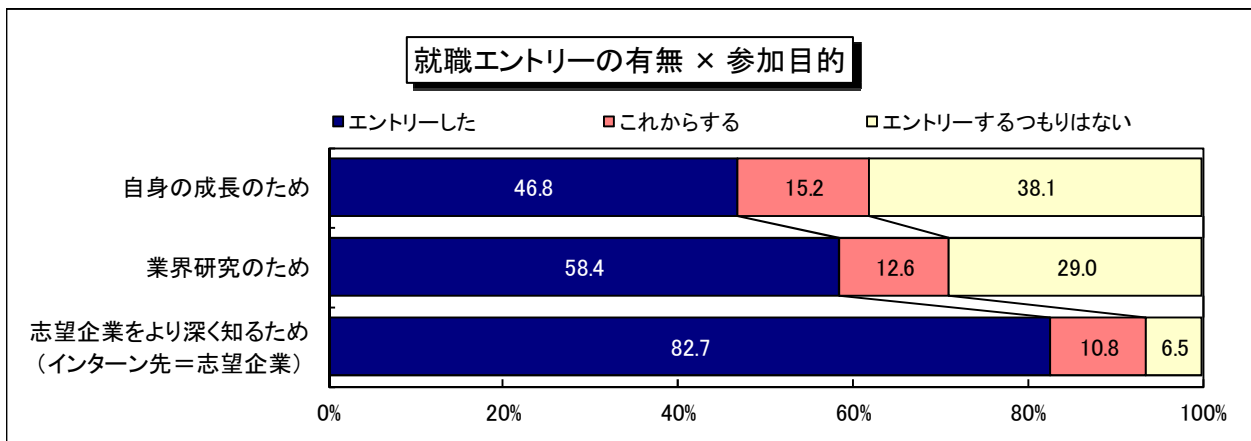
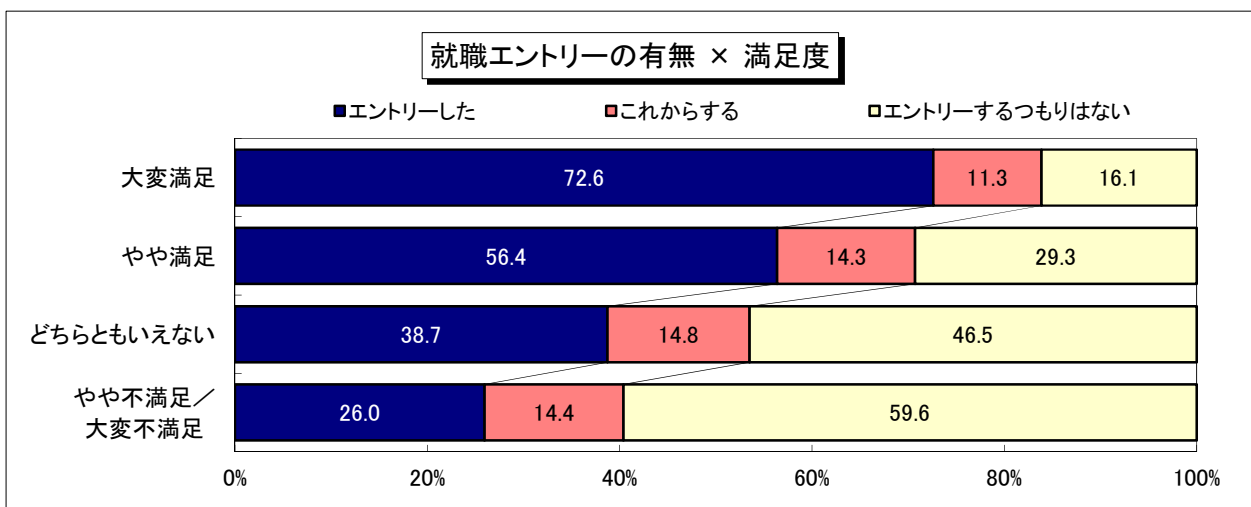
参加したインターンシップの「満足度」と「就職エントリーの有無」との関係性をクロス集計した。

満足度が高いインターンシップほど、就職活動が始まってからその企業に「エントリーした」という割合が高く、強い相関関係が表れている。「大変満足」では「エントリーした」が72.6%と7割を超えており、満足度の高さがその後の就職エントリーに大きく影響することがうかがえる。逆に満足度の低い層(やや不満足/大変不満足)では「エントリーするつもりはない」が59.6%と6割近くに達している。

就職エントリー状況を「参加目的」ともクロス集計した。「志望企業をより深く知るため」グループでは82.7%と8割超が就職活動時にも志望を継続し、エントリーをしていた。しかし「エントリーするつもりはない」が6.5%と、少数ながらも志望企業のインターンシップに参加し、その企業を深く知った結果、志望を取りやめているケースがあった。

「自身の成長のため」に参加したインターンシップにおいては、「エントリーした」は46.8%と5割弱。インターンシップ参加時には「就職先」としての関心が薄かったとしても半数弱が就職エントリーに繋がっている。

たとえ就職先として関心の高い企業や業界であっても、インターンシップでの満足度が低かった場合にはその後の就職活動時にエントリーすることはないということが分かる。インターンシップを実施する目的は企業によって様々だが、その後の採用を意識するのであれば、その内容やプログラムなど十分に吟味する必要があるだろう。



10. インターンシップに参加しやすい時期・期間

インターンシップに参加しやすい時期と期間について、プログラム形式ごとにそれぞれ複数回答で尋ねた。どの形式でも参加しやすい時期は「大学3年生の7～9月」が最も数値が高く、「大学3年の1～3月」がそれに続くという結果だった。大学の長期休暇を利用して参加したい学生が多いことが分かる。また、「大学1年」「大学2年」といった低学年時もそれぞれ1～2割程度あった。

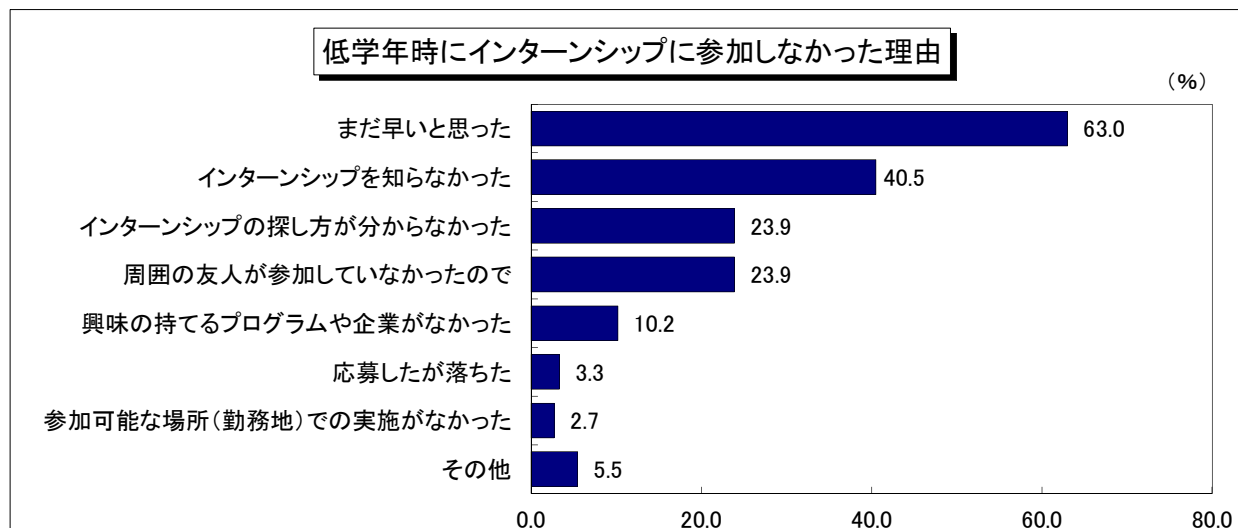
参加しやすい期間については、「見学&体験タイプ」「講義タイプ」は「1日」が最も多く、「プロジェクトタイプ」と「実務・実践タイプ」は「1週間程度」が最も多かった。

【時期】					(%)
	見学&体験タイプ	講義タイプ	プロジェクトタイプ	実務・実践タイプ	
大学1年	12.6	15.1	8.2	8.8	
大学2年	19.0	20.7	14.4	15.7	
大学3年(修士1年)4月～6月	15.9	24.6	12.5	12.4	
大学3年(修士1年)7月～9月	73.1	63.2	74.6	74.4	
大学3年(修士1年)10月～12月	32.0	36.8	27.7	22.3	
大学3年(修士1年)1月～3月	39.9	42.0	38.2	34.2	
あてはまるものはない	5.5	7.6	6.8	7.9	

【期間】					(%)
	見学&体験タイプ	講義タイプ	プロジェクトタイプ	実務・実践タイプ	
半日	33.2	49.1	15.9	10.9	
1日	56.6	57.6	27.7	19.8	
2～4日	39.4	23.4	41.5	33.8	
1週間程度	34.2	12.4	52.7	48.6	
2週間程度	9.5	2.9	22.0	32.9	
3週間以上	1.9	0.7	6.9	15.5	
1カ月以上	1.9	0.4	5.5	12.9	
あてはまるものはない	5.2	6.5	6.5	7.8	

11. 低学年時にインターンシップに参加しなかった理由

低学年時にも参加する素地があることが確認できたが、今回の調査では、大学1～2年時のインターンシップ参加はわずか2.4%だった。低学年時にインターンシップに参加しなかった理由を複数回答で尋ねると、「まだ早いと思った」が63.0%で最も多く、「インターンシップを知らなかった」が40.5%で続く。学生が将来のキャリアを考えるうえでインターンシップが重要な位置を占めるのは間違いなく、低学年時からの参加が望まれるが、まずは啓蒙と周知徹底が必要と言えそうだ。



■参加した感想（良かった点）

- 社員の方々がざっくばらんに話をしてくれたのがよかった。また、大学で学んでいることが無駄にはならないことも知ることができた。 <1週間程度／見学&体験>
- 社員との座談会を通して、職務内容や心構えを知ることができた。 <1週間程度／見学&体験>
- 外資系金融機関と日系金融機関の違いを、実感することができました。文字や情報・噂だけで聞くだけでなく、実際に見られたことが良かったです。 <2~4日間／講義>
- 3日間にわたるセミナー形式で、人事の方が社会に出るといったことはどういうことなのか説明してくれた。この説明により今までは学生目線であった自分に気づき、ビジネスの視点が必要だと学べ、以降の活動の役に立った。 <2~4日間／講義>
- 4人1組で行ったのですが、限られた時間の中で顧客に一番益をもたらすであろうプロジェクトを計画し、実際に顧客にヒアリングしたり、プレゼンテーションしたり、とても楽しかったです。 <1日間／プロジェクト>
- 非常に学生目線で、何をもち帰ってほしいかという目的が明確であった点です。人事部長の方からもお話しいただいたので、本気度が感じられ、良かったです。 <2~4日間／プロジェクト>
- ベンチャー企業の良さを理解できた。 <1カ月以上／プロジェクト>
- 企業理解が深まった。会社はもっと殺伐としているイメージだったが、実際は違って、働く意欲を持てた。 <1週間程度／実務・実践>
- インターンシップ最終日にビジネスモデルの発表で、社会人目線での改善点・プレゼン方法を教えていただいたこと。 <2週間程度／実務・実践>
- 社会人に囲まれて仕事をできたので、就活を前に働く自分をイメージしやすくなった。 <1カ月以上／実務・実践>

■参加した感想（不満に思った点）

- 社員との接点が少なかった。 <2~4日間／見学&体験>
- 自分たちの行動や企画した商品がどうだったのか、フィードバックをしていただきたかった。 <2~4日間／見学&体験>
- 全体的にプログラムがあまり練られていないと感じた。 <2週間程度／見学&体験>
- 半日のプログラムでは物足りなく感じた。また、グループワークの内容は企業のインターンシップならではの言えない内容で、学生のためというよりは企業側が学生を観察しているように感じた。 <半日／講義>
- 内容のレベルが低い。自分の人生設計をシールで貼りながら、学生同士話し合うのは正直、小学生レベルだった。 <半日／講義>
- もう少し実務に近い経験を試みたかった。 <1週間程度／講義>
- 社員の方から1人1人へ評価があると書いてあったが、それは勝ち進んで次のステージに行った場合の話で、思っていたことと違った。 <半日／プロジェクト>
- 実際の仕事との関連性が不明だった。 <1週間程度／プロジェクト>
- 実際の選考に影響することを意識した学生が多かったからか、人事の方への積極的なアピール合戦が目についた。致し方ないのかもしれないが、個人的にはあまりよい感触を抱けなかった。 <1週間程度／プロジェクト>
- 職場配属だったが、社員の方は普通に仕事をされているため、質問など声をかけづらかった。 <2週間程度／実務・実践>
- 正直、就職活動に直結しない、採用に影響ないインターンシップだと社員の方に説明された時、少しショックでした。少しは優遇されるものではないかと甘くみていたので。 <2週間程度／実務・実践>
- 開発をみっちりやる関係上、会社について詳しく聞く機会がなかった。自分でどんどん聞いていけばよかったのかもしれないが、会社全般の話をいろいろな社員から聞いてみたかった。 <3週間以上／実務・実践>